

宿題を出す～自ら学ぶ習慣を身につけさせる～

宿題は成績を高めるためのものではありません。まして授業でやりきれなかったところを、「あとは宿題」と称してすり替えるような行為はもってのほかです。

教師の不手際の後始末として宿題を使ってはいけません。

宿題の目的は二つに限定されるべきです。一つには漢字や計算問題といった知識の定着や技能の向上。もう一つが「家に帰った後も必ず一定時間机に向かう」という習慣の形成です。読解力や思考力など総合的な学力の向上は、授業中の生きたコミュニケーションを通じて行われるものであり、自宅学習の範疇に入れるのは間違いです。だからこそ宿題を出す際にはいつも、具体的な達成基準を示すべきなのです。

「理由を三つノートに書いてきなさい」
「三回読んで、それぞれ何分かったのかを書いてきなさい」

「縄跳びを50回ずつ三回飛んで、その時間を記録してきなさい」

宿題は常に、具体的な数量と方法で明示して出題するべきです。やったかやらなかったかの判別が容易であること、その達成度合いを明確に評価できること。この条件をクリアできていない宿題では、子どもたちにとって「やらなくてもわからない、叱られない」「だったら遊んでいた方がいいものになってしまう。これは達成度を下げるだけでなく、自宅学習の意義を見失わせる阻害要因になりかねません。逆に教師が宿題の意義をしっかりと捉え、計画的に宿題を出し、これを授業で評価していけば、子どもたちは自然に「自宅での勉強に意味がある」ことを体験できるようになるのです。

宿題はもともと嫌なものです。しかし自らを向上的に変えていくには、嫌なことや面倒なことにもきちんと取り組み、積み重ねていく訓練が必要です。そしてその努力が確実に実を結ぶのだということは、実際に自分の成長を実感してみなければわかりません。

自らの「向上的変容」の喜びを知るまでには時間がかかります。けれどいったん登りつめた時の感動を知った人にとっては、長い道のりも苦行ではなくなります。日々の出題とそのチェック・評価は教師にとっても負担ですが、それは教師自身の忍耐力を育てる行為でもあるわけです。

人生の授業は、教室の中だけに留まるものではありません。授業と自宅学習の輪を確実につなぎ、その子どもが教室を離れても、自分の意志で学び続けるための基盤づくり。それが宿題のもっとも重要な意義なのです。

野口流「授業の作法」より 野口芳宏：著(学陽書房)

大きな災害を経験した後は、数年が経過しても見えにくいかたちで影響が残っている場合がある。

教師の役割は重大だ！



「子ども健康教育相談」から

前号で自己統制力の育成について記述しましたが、不適応状態の子について面接相談を重ねていますと、「抑制」のことに辿り着く場合があります。

幼児期から自分の意のままに育った子の耐性不足はしばしば多方面から指摘されることです。

その不足は自分の欲望をこらえる力の弱さにつながっていきます。

しかし、日常生活ではいつも満足ばかりを求めてばかりはいられません。

自我は状況を判断し、現実原則に従って我慢をします。

この自我の我慢する作用が「抑制」になるのです。



子どもたちの心のケアについて

＝震災から数年経って、なお心に不安を抱える

子どものケア ＝

事例：小学5年生

－震災から3年を経ても、トイレの扉を閉めることを怖がる－

児童は小学2年生の時に震災を経験していた。小学5年生の自然学校の事前健康調査で、夜ひとりトイレに行くことを怖がり、トイレのドアを開放したままでないとう便できない、夜尿がたまにあるという記述があった。この調査を元に、保護者に思春期の児童が上手に自立するよう校医への健康相談を勧めた。本人と母親のプライバシーが守られ安心して相談できるように、放課後に行うよう設定した。また、自然学校を安心して過ごす方法を一緒に考えるために、健康相談の場に、担任、養護教諭が同席した。

兵庫県教育委員会

「災害を受けた子どもたちの心の理解とケア」P18

支援のポイント

- ① 教師ができることとしては、いつかきっとよくなることを告げ、安心感を与えるよう努めること。また、養護教諭や校医、スクールカウンセラー等の専門家と連携して支援することが考えられる。そして、保護者も含めて、子どもの支援の在り方を決めていくことが重要である。
- ② 教職員の協働体制が日ごろから確立されていることが重要である。

